

校長通信「学ばん共に」

終業式

その11 「ドラえもん『幻の最終回』」(2022/7/22)
(2 学期終業式の動画より)

のび太とドラえもんに別れの時が訪れます。
それは、なんともあっさりと・・・。
青い空には白い雲が浮かんでいました。
のび太がいつものように

学校から帰って来た時のことです。
そう、いつものように・・・
学校では宿題を忘れて先生に叱られたり、
帰り道ではジャイアンにいじめられたり、
スネ夫に自慢話を聞かされたり、
未来のお嫁さんであるはずのしずかちゃんが
出来杉君との約束を優先してしまったり、
小学生ののび太にとっては
パターン化されたイベントの全てが
安らかな日常を意味していました。
次のイベントはきっと
"ママに叱られる"だったにちがいません。

「ただいまー ドラえもん!!
あのさー今日ねえ・・・。」
そんないつもの風景で、
ドラえもんが動かなくなっていました・・・。
当然、のび太にはその理由は分かりません。

喋りかけたり、叩いたり、
蹴ったりしっぽを引っ張ってみたりもしました。
何の反応も示さないドラえもんを見て
のび太はだんだん不安になってしまいます。

付き合いも長く、
そして固い友情で結ばれている彼ら。
ようやくのび太にも、
動かなくなったドラえもんが
今どういう状態にあるのか、
おぼろ気ながら理解できたのです。
その晩、 のび太は枕を濡らします。

ちょこんと柱を背にして座っている
ドラえもん・・・。
のび太は眠りにつくことができません。
泣き疲れて、 ただぼんやりしています。

無駄と分かりつつ、 いろんなことをしました。
できうことはなんでもやりました。
当然ですがポケットに手を入れてみたり、
スペアポケットなんてのもありましたが
動作しないのです。

何の反応も示さないドラえもん。
そして、のび太が
16 回目の寝返りを打った時…
「タイムマシンだ!!」

なんで今まで気づかなかったのか、
のび太の引き出し、 そう、
タイムマシンの存在に気がつくのです。
未来の世界のドラミちゃんなら助けてくれる。

ろくすっぽ着替えず、
のび太はパジャマのまま、
タイムマシンに乗り込みます。
目指すは 22 世紀、
これで全てが解決するはずでした。

のび太は、なんとかドラミちゃんに
連絡を取り付けました。
しかし、のび太はドラミちゃんでも
どうにもならない問題が発生していることに、
この時点では気がついていませんでした。

いえ、ドラミちゃんできえも
思いもしなかったことでしょう。
「ドラえもんが治る!」
のび太はうれしかったでしょう。

せかすのび太と
状況を完全には把握できないドラミちゃんは
とにもかくにも 20 世紀へ。
しかしその後

人生最大の落胆をすることになってしまうのです。

動かないお兄ちゃんを見て、
ドラミちゃんはすぐにお兄ちゃんの故障の原因がわかりました。
正確には、故障ではなく電池切れでした。

そして電池を交換する、
その時、ドラミちゃんは
その問題に気がつきました。
予備電源がない・・・。
のび太には、なんのことか分かりません。

早く早くとせがむのび太に
ドラミちゃんは静かにこう伝えます。
「のび太さん、お兄ちゃんとの思い出が
消えちゃってもいい?」

当然、のび太は理解できません。
なんと、旧式ネコ型ロボットの耳には
電池交換時の予備電源が
内蔵されており、
電池交換時に
データを保持しておく役割があったのです。

そして、そうです、
ドラえもんには耳がない・・・。
のび太もやっと理解しました。

そして、ドラえもんとの思い出が甦ってきました。
初めてドラえもんに出会った日、
数々の未来道具、
過去へ行ったり、
未来に行ったり、
恐竜を育てたり、海底で遊んだり、
宇宙で戦争もしました。
鏡の世界にも行きました。
どれも映画になりそうなくらいの思い出です。
ある決断を迫られます...

ドラミちゃんは、色々説明をしました。
ややこしい規約でのび太は
理解に苦しみましたが、

- "1.電池を交換するとドラえもんは
のび太との思い出が消えてしまうこと
- "2. 今のままの状態では
データは消えないこと”、
- "3. ドラえもんの設計者の名前は
設計者自身の意向で明かされていないこと"
- "4.修理および改造は自由であること
この4つは理解できました。

のび太は人生最大の決断を
迫られていたのです。
そして、東の空が白む頃、
のび太は自分に言い聞かせるように
つぶやきました。
「ドラミちゃん、ありがとう。
ドラえもんはこのままでいいよ。」

ドラミちゃんは後ろ髪ひかれる想いですが、
何も言わずにタイムマシンに乗り、
去っていきました。
のび太が小学6年生の秋のことでした。

あれから、数年後・・・。
外国留学から帰国した
青年のび太のどこか淋しげな目には、
とても力強い意志が宿っていました。
何か大きく謎めいた魅力、
昔と変わらぬ眼鏡をさわるしぐさ、
成長したしずかちゃんも
のび太に惹かれていきました。

その後、彼は最先端のテクノロジーをもつ
企業に就職し、
めでたくしずかちゃんとの結婚も
果たしました。

ドラミちゃんが去ってから、のび太は
ドラえもんは未来に帰ったと
みんなに告げていました。
そしていつしか、誰も
「ドラえもん」のことは
口にしなくなっていました。

しかし、のび太の家の押し入れには
「ドラえもん」が眠っています。
あの時のまま・・・
のび太は技術者として、
今、「ドラえもん」の前にいるのです。

小学生の頃、学校の成績が悪かった のび太ですが、
彼なりに必死に勉強しました。
自らの意志で中学、高校、大学と進学し、
ロボット工学の分野で
確実に力をつけてきました。

就職後、企業でも
順調に研究成果をあげ、
世界で最も権威のある大学で
ロボット工学の博士号を
取得するチャンスにも恵まれ、
それを見事にパスして来たのです。
そう、
"ドラえもんを治したい"、
その一心で・・・。
人間はある時を境に、
突然変わることができるのです。

それが、のび太にとっては
"ドラえもんの電池切れ"でした。
"修理が可能であるならば・・・。
その思いがのび太の原動力でした。

昼下がりの野比家、
しずかちゃんは屋上の研究室に
呼ばれました。
今までは、のび太から
絶対に入ることを禁じられていた研究室に。

中に入ると夫であるのび太は
微笑んでいました。
そして机の上にあるそれをみて、
しずかちゃんは言いました。
「ドラちゃん・・・?」

のび太は言いました。
「しずか、こっちに来てごらん、
今、ドラえもんのスイッチを入れるから」
頬をつたうひとすじの涙・・・
しずかちゃんはだまって、
のび太の顔を見えています。

この瞬間のため、
まさにこのために
のび太は技術者になったのです。
なぜだか失敗の不安はありませんでした。
こんなに落ち着いているのが
変だと思うくらいのは、

静かに、静かに、そして丁寧に、
何かを確認するようにスイッチを入れました。
ほんの少しの静寂の後、
長い長い時が繋がりました。
「のび太くん、宿題は済んだのかい?」

ドラえもんの設計者が謎であった理由が
明らかになった瞬間でもありました。
あの時と同じように、
その日も青い空には
白い雲が浮かんでいました。

※この文章は「ドラえもん」のファン(佐藤宣夫さん)
が1998年1.2月頃に書いた小説をもとにしています。

※ 関連動画…<https://youtu.be/opxBwLuKaC0>

(北村健治)